

汝 我が名を呼ばわるなかれ

大きな瓦礫をよけて歩きたび、細かな埃が風に舞い飛ぶ。

少女は時々、咳き込んで歩を休める。

ふいと振り向き、腰のあたりまで崩れた壁のなかを覗けば、そこは他の家々と変わらぬ廃墟、暴力による破壊と死を経験した床のうえに、柱の影が落ちていただけだ。

彼女はリュックの肩を少し揺ると、また細い脚を踏み出す。一歩、二歩、慎重に、歩き始める。まるでやっと歩き方を覚えたばかりの幼子のように。高くなり始めた陽に照らされた頬がわずかに強張り、黒い睫毛の裡にあるはずの瞳には、虚ろな時をしんと止まらせている。

なぜそれが見え、聞こえるのか、わたしにはわからない。

千の目を持つ者、万の耳を持つ者、わたしは、そのようにつくられた。

乾いた象が低い灌木を踏み荒らして歩き、暗い海中では魚たちが銀の腹を翻す、蒸れた草のなか原色の蛙が産卵を続け、白夜の氷原には狼の遠吠えが響き渡る……

わたしは、あらゆるところで目となり、耳となり、姿なき傍観者となる。

あの少女がまた歩き始めた。白かった布靴は、灰色の泥に染まっている。足音をたてずに彼女は歩いていく、街のざわめきをめざして。

その後ろ姿には、災厄が詰め込まれている。

わたしのなかに、まだ起こらないその光景が、ぼんやりと映し出される。

古ぼけたオルガンの調べに少年たちの聖歌、高い天窓から漏れて

くる朝の明かり、それから轟音とともに碎け散るステンドグラス、色とりどりに尖った破片、蠢く人々のうえに煌めきながら降り注ぐ、赤、青、緑……

少女の下の兄とその仲間たちが連れ去られて、もう二ヶ月になる。長いこと歩いて旧市街へ入った彼女は、狭い脇道にすべり込み、さつと左右に視線を走らせた。人がいないのを確認すると、そばの白い石塀にそつともたれた。それから、服のポケットに手を入れ、一枚の写真をひっぱりだした。薄い紙の四角い隅が、少しまるみを帯びている。それは珍しく家族全員で撮ったもの、母親のアルバムから黙つてくすねてきたものだ。下の兄の体臭がまだ残る上着のなかで華奢な身体が泳ぐ。もどかしげに袖をまくりあげると、彼女はちいさなちいさな顔のひとつひとつに見入った。

右端が一番年上の兄、このときはまだ生きていた。トラックから兵士に撃たれたのは、もつとあとだ。この兄は豊かな髪を真ん中で分け、白い歯を出して笑っている。

その隣は、まだ結婚していなかった姉。少し離れた町へ嫁いで、もう一年半が過ぎようとしている。半年まえに子供が生まれると、その男の子には、殺されて死んだ兄の名をつけた。

下の兄は少女の肩を抱いて笑っている。内気そうな、はにかんだ笑顔。

小柄で痩せつぱちの彼女は、まだ十二才、伸ばした銅色の髪をきれいに梳いて、背中にたらししていた。

今、その髪はもうない。昨夜、家の裏庭で切り落とした。ひとりで。男の子に見えるように、短く、もつと短く。足元に落ちた髪をそのままに手鏡を見たら、彼女は下の兄によく似ていた。

下の兄は牛のように鞭と銃で追いつ立てられ、牢に囚われたまま死んだという。姉は、これからさき生まれくる子に、再び兄の名を与えようとするだろうか。

一週間ほどまえ、遺体のない簡素な葬式が終わり、下の兄の部屋へ入った彼女は、ベッド際の壁に穴があいているのを見つけた。ちよつと見にはわからない、ただのひび割れに見えた線に深く爪を

たてると、ごとりと石版がはずれた。彼女は目を見張り息をとめて、暗がりには隠してあったものを注意深く取り出した。そのあと、また石版をもとに戻しておいた。

兄の秘密であったそれが、今は背中のリュックに収まり、彼女を駆り立てている。

写真の真ん中で椅子に腰掛けた母は、楽しげに笑っている。父はとうに亡くなっていったが、母は子供たちに囲まれて笑っていた。最後まで家に残っていた娘が出ていったと知れば、どんな思いがするだろう。朝早く、母の寝顔に別れを告げて出たと知ったら。まだこの時間なら帰ってくると信じている、でも、やがて日が落ち月が昇り、さらに夜が更けたら。

いつも側にいた痩せっぽちの娘。きょうだいみんなに可愛がられて育った末っ子。まだ薄い胸をした、やっと十五になる娘。

彼女は、口のなかで母に詫びる言葉をつぶやいた。写真に軽く唇をつける、しばらくのち、指先に力をこめてそれを引き裂いた。一度、二度、三度……何度も。兄たちや姉、母の小さな姿が、手の中で細かな断片となり、原形を留めぬ一握りの紙砂になった。彼女はそれをすべて口に入れると、かさかさする感触をごくりと呑み下した。

もつずっと放置されたままの誤解がある。

わたしが創造したものなど何ひとつない、ということだ。

むしろ、わたし自身がいつのまにか造られ、洞穴の壁に、粘土の塊に、木切れや羊皮紙のうえに、わたしの姿やわたしの言葉とされるものが、さまざまなかたちをとって残されてきた。雨水の一滴一滴がゆるやかな大河のうねりをつくるように、それは人々のささやかな願望が集まり溢れたものである。

あれは、いつのことだったか。

かつてわたしは枯れた大地に豊饒を祈る人々を見た。

(だが、わたしには祭祀の輪に駆けつける足がない)

わたしはまた、病の子を抱えた女の啜り泣きを聞いた。

(だが、わたしにはその肩をさすってやる掌がない)

無謀な戦いを挑みに敵陣へ向かう男たちを見た。

(だが、わたしには彼らを引き留める腕がない)

饅えた裏通りで快樂の注射針を静脈に突き立てる子供、太った八工を脛の縁にたからせたまま衰弱してゆく老人、ビルの屋上から柵を乗り越えようとしている男女、きつく目を閉じ新聞紙をかぶって地下通路に寝る男、磨き抜かれた台所のテーブルに独り突っ伏している女……

わたしには、そこに運ぶべき実体もなく、彼らの小指の一本すら動かすすべもない。なのに、なぜ彼らはわたしを呼ぶのだろう、千の名、万の姿を、それぞれが宙に描いて。誰の呼びかけにも応える声を持たず、太古より数百万年もの長きにわたって、ただ傍観しているだけの、このわたしなのに。

夜ごと日ごと、つぶやき、叫び、ささやき、罵り、なおも求める呼び声が、絶え間なくわたしを斬りつけ、苛み続ける。

おまえたちの偶像は皆、すでに傷だらけだ。

共同墓地の裏手にあるオリブの茂みの下で、彼女は一夜を明かした。リュックをしっかりと胸に抱いて目を閉じていたけれど、けつきよく眠れなかった。これからしようとしていることについては、深く考えもしなかったが、ただ、家に残してきた母のことだけが気になっていた。

八時の鐘が鳴るのをうつすら聞くと、またリュックを背負いながら立ち上がった。行き先は、昨夜のうちに目をつけてあったし、まだ時間もたっぷりある。

向こうの墓石の前には、もう花を供えに来ている人がいた。その老婦人は、ゆったりした黒いドレスを着て、頭を垂れたまま跪いている。彼女が側を通り過ぎるとき、ちらりと顔を上げたが、その薄青い瞳には、なんの感情も表れていないように見えた。

墓地を出ると、少女は通りを歩き出した。整備されたメインストリートから少し外れて、旧市街の中心からわずかに北の方角を目指した。

昨日の朝からずっと歩きづめだ。バスや地下鉄には乗らなかった。

乗り方がよくわからなかったからだし、なんとなく誰かに見咎められそうな気がして、怖くもあつた。子供がどこか近所へ遊びに行くような、そんな軽やかな足取りを真似て、行く先々の景色に溶け込んでいたかつた。

教会まで来ると、彼女はリュックを肩から下ろし、脇のしたに抱えこんだ。ちょうど後から来た家族連れにまぎれ、ひんやりと陰になった入り口を抜けると、天井の高いホールに入った。

日曜のミサに来た会衆は、あらかた席についていた。向かつて左右両側の壁には大きな窓があり、色とりどりのステンドグラスが、ローブをまとった人々や鳩などを描いて填め込まれている。丸い天窓から光が射し込み、人々の頭をやさしく照らしている。彼女は人のいない一番うしろの席に、そつと腰掛けた。

やがて、どこかしら懐かしさを感じさせるオルガンの音が響き、皆が起立して歌い始める。会衆をリードしているのは聖歌隊のボーイソプラノ。その旋律の妖しい美しさに、彼女はゾツと鳥肌立った。これが、異教の神を讃える歌なのだ。

彼女の住むこの土地に、あとからやって来た者たち、占領し、脅し、略奪し、支配する者たちの歌。ただ小石を投げただけの丸腰の子供に、銃先をつきつけて恥じない者たちの歌。圧倒的な力の差を感じながらも、なお果敢に抵抗を試みる若者たちの組織を、端から見つけたしては容赦なく叩き潰していく、あの者たちの歌なのだ。

あらゆる理不尽の象徴が、いま目前に立っている、祭壇の奥に。

(おまえたちの偶像は、無念の死に呪われている)
つるりとなめらかな大理石に彫られて。

(おまえたちの偶像は、流れ出す血と脂でべとべとだ)
少女はそれを凝視する。

(おまえたちの偶像は、いくつもの罪にまみれている)
ふたりの兄の名を胸の中で呼び、彼女は愛しい面影の向こうに自らの神を見る。

少女よ、汝、我が名を呼ばわるなかれ。

(おまえたちの偶像は皆、すでに傷だらけだ)

歌が終わる。彼女はリュックをそっと開き、ひやりとした金属の感触を探す。ずっしりと片手に重いそれを取りだして、素早く上着のしたに隠す。

会衆が座る。誰かがマイクで説教を始める。どこかで咳払いがする。ねっとり右手に粘る汗を、彼女はズボンの腿でぬぐう。ピンを引き抜こうと指をかけたとき、誰かがじっとこちらを見ているような気がした。

顔を上げると、二列ほど前の席から、小さな男の子が身体をひねるように彼女を見つめていた。柔らかな栗色の短い巻き毛、ほんのり赤味のさした頬と唇。目が合つと、親しげに笑った。彼女の指にかかっていた筋肉の動きが、一瞬止まる。まもなく男の子の隣に座った母親らしき女が気づき、不自然な息子の姿勢をたしなめた。それから彼女の存在を一瞥すると、ほんのかすかに片方の眉を上げた。不審そうに。あるいは、尊大に。

彼女の手には再び動きが戻った。下の兄の部屋に入って以来、何度も頭に思い描いてきたことを、ここでまた繰り返す。ピンを引き抜いたら、二秒かぞえる。いち、に。二秒かぞえてから、このホールの真ん中めがけて放り投げる。失敗は、できない……

少女の口元が固く引き締まる。

上着の下で、冷たい武器を握った両の手に、ぐいと力が入った。

了